

柳田国男の「野の学問」：
新渡戸稲造・郷土会・雑誌『郷土研究』

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 静岡大学大学院教育学領域 公開日: 2023-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢野, 敬一 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.14945/0002000151 |

柳田国男の「野の学問」

新渡戸稲造・郷土会・雑誌『郷土研究』

YANAGIDA Kunio's 'Scholarship in the Field'

矢野 敬一¹

Keiichi YANO

（令和5年11月30日受理）

1. 「野の学問」という問い

1.1 「野」という言葉の2つの意味

柳田国男が築いた民俗学は、しばしば「野の学問」と呼ばれる。しかし、ふと立ち止まって考えると、この「野」はどのように音読するのか。「ノ」とも読めるし、あるいは「ヤ」でもいけそうである。

その読みがもたらす意味の広がりの違いを読み解いたのが、佐藤健二だ。佐藤は、「ノの」と重ねて読めば音の響きはやさしく、「民間」というイメージとともに、「フィールド」の野の現場に誘う、という。逆に「ヤ」と強く発音すれば、「野党」「下野」といった語感ともに対抗性が強調される。

さらに「野」には別に二重の意味がある。一つは実際のフィールドとしての意味、そして今一つは、支配的な研究手段であるとともに社会的支配の手段でもある文字記録に対して、一定の抵抗力すなわち「在野性」を持つ、声や身ぶりに刻み込まれたものの収集と整理と一覽と比較とを意味する、という。そうした認識を生産する実践を支えている「方法」のレベル、すなわち主体と対象とを媒介する領域における「野」の復権こそが民俗学の可能性なのだ、と佐藤はいう [佐藤 2015 310-311]。

佐藤の指摘で重要なのは、「野」が意味するのはあくまでも「方法」のレベルの話であり、単純にアカデミズムの世界に所属しているか否かを問うものではない、ということだ。実際、柳田とアカデミズムそのものである京都帝国大学文学部史学科とは、早い段階から親和的・協力的な関係があった。それはアンチ東大の意気込みが京都帝国大学全体だけではなく史学科にも強く、西田直二郎以下、狭義の文献史学にとどまらない新たな歴史学が模索されていたからである。その意味で柳田にとっては学問的援軍となった [菊池 2009 163-166]。東京帝国大学が担っていた文献史学との距離が、この両者の接近を可能とさせたのである。東京帝国大学と京都帝国大学という2つの大学。両者の史学の性格の違いが、柳田のアカデミズムとの距離を規定していたのだ。

¹ 社会科教育系列

1.2 柳田国男の学歴と官職での経歴

「野」の所在を単純に学歴や職歴等で振り分けることができないのは、柳田自身の経歴を振り返れば明らかだ。それだけを取り上げれば、およそ「在野」のイメージからは程遠い。まず、柳田は東京帝国大学卒という学歴エリートであり、法科大学政治学科を55名中、9番目の成績で卒業している。同時に大学院にも籍を置き、農政学の研究を続けた [小田 2019 27]。

9番目の成績とは、どのような意味をもっていたのか。1918（大正7）年までの東京帝大の卒業生名簿には、各学科の卒業席次順に氏名が記載されている。それをもとに帝大教授と席次との関係を調べた岩田弘三によれば、1899（明治32）年以降に医学科以外で帝大教授となった者の53.5%が主席卒業生、これに次席卒業生を加えると72.7%にまで達することを明らかにした [岩田 2011 37]。たしかに柳田の成績では、帝大教授職はおそらく無理だったろう。とはいえやはり9番目という成績は、上位であることに変わりはない。

それは卒業後の官職での経歴にも反映されている。本稿で扱うのは、主に柳田の大正時代でこの間、柳田は貴族院書記官長に就任している。貴族院書記官長は官等でいえば、勅任官の一等ないし二等に相当し、一等の場合、法制局長官や公使、陸海軍の中将と、二等の場合は各省の次官、局長、陸海軍の少将と同等で、柳田は貴族院書記官長就任後、二等から一等に昇格している。柳田が得た地位は、実のところなかなかの顯職だったのだ [岡谷 1985 3]。

その学歴、官職での経歴は、柳田が新たな学知を模索する上で、やはり見落としとしてはならない点だ。というのも、戦前の社会は現在とは比較にならぬほど、学歴をめぐる断層の存在が大きかったからである。竹内洋は、その断層は3つあったとする。ひとつは尋常小学校卒や高等小学校卒と、中等学校卒業業者である地方の中堅やインテリとの断層。二つ目は中等学校卒業業者と、専門学校や大学などの高等教育卒業業者との断層だ。さらに三つめとして専門学校や私立大学卒業業者と、帝国大学卒業業者の間に存在した。ちなみに旧制高校卒業業者は、同じ年度の20歳男子人口100人に一人を超えることは戦前、ついぞなかった [竹内 2011 37]。こうした断層の存在は、柳田が展開した学知の軌跡をたどる上でのポイントのひとつとなる。

1.3 学歴という断層を横断する「運動」として

柳田が自ら新たな学知を展開するにあたって模索せざるを得なかったのは、それまでにない「方法」だけではなかった。学歴による断層への向き合い方についても、試行錯誤する必要性に迫られる。

柳田の学のスタート地点として位置づけられる『後狩詞記』で資料提供をした宮崎県の椎葉村村長・中瀬淳は、1864（元治元）年生まれ。1883（明治16）年に19歳で村役場書記となっていること [千葉 1985 219] を考えると、中瀬は高等教育を経していない。また、『遠野物語』で柳田に遠野の話をした佐々木喜善は、その年譜を見ると1902（明治35）年に私立岩手医学校に17歳で入学した後、翌年中退して上京。その年、国語伝習所高等科に通ったり、哲学館大学教育部第二科聴講生となり、翌年私立哲学館大学教育学部に入學し、同年早稲田大学文学部に転学する。しかし、その卒業については年譜にはない [遠野市立博物館 2003 583-584]。高等教育には接してはいるが、かなり不規則な学歴ということになる。

柳田自身は高等教育を経ており、当時の学歴社会の最上層に位置していた。だが、自身がその著作を編むにあたって向き合ったのは、多くは高等教育とは無縁なさまざまな層の人々だった。柳田が新たな「方法」を模索する過程は、必然的に学歴をめぐるいくつもの断層をいかに

して横断するか、という「運動」としても構想されなければならなかったのだ。

そうした「運動」としての模索は、柳田がその学知を構想しだす段階から同時並行的になされなければならなかった。その過程をたどることは、柳田の「野の学問」の性格の一端を明かすものとなる。本稿では柳田初期の営みについて、大正期に郷土会を通じて共に歩みを進めた新渡戸稲造の軌跡を参照することによって明らかにしたい。その作業での視点は「学歴」であり、そこに存在する断層をいかに架橋しようとしたのかが論点となる。

年齢差があるとはいえ新渡戸、柳田ともに農政学から出発し、両者共振しあう関係だったことは疑いえない。後述するようにサロンの集いのなかから学知を生み出そうとする姿勢、そして「運動」として雑誌を活用する方向性も相通じる。だが、学歴がもたらす断層に対する対応は大きく異なっていた。その違いにこそ、柳田の「野の学問」の性格が端的に読み取れるのだ。本稿が明らかにしたいのは、この点だ。

2. 新渡戸稲造と柳田国男 郷土会への道筋

2.1 柳田と新渡戸との出会い

柳田国男と新渡戸稲造とが大正期、深く関わっていたことは意外と知られていない。だが、新渡戸が提唱した「地方学（じかたがく）」と、そこから出発した郷土会の存在が、柳田の学に対してある決定的ともいえる学問的個性を与えていったと、早くから後藤総一郎は述べている [後藤 1987/初出 1976 285]。その指摘は、柳田の学知の展開を考える上で、今なお重要だ。

1862（文久2）年生まれの新渡戸は、札幌農学校を卒業後、ジョンズ・ホプキンス大学、ベルリン大学等での留学を経て札幌農学校教授、台湾総督府民生部殖産課長、京都帝国大学教授等を歴任。郷土会発足時点では、第一高等学校長と東京帝国大学法科大学教授を兼任していた [貝出 1969 543-547]。1875（明治8）年に誕生した柳田より13歳年長である。こうした年齢差、さらに二人がともに農政学を修めていたこともあり、一時期両者はほとんど「師弟」といってよいほどの交流があった。しかし新渡戸の活躍の分野が主として国際政治の分野だったこともあって、両者の関係を見えにくくしてきた [佐谷 2015 6]。

両者の何らかの接点はいつから生じたのか。新渡戸の農政学上の主著『農業本論』（1898年刊）を大学時代の柳田が手にしたことが最初だとみるのが、橋川文三だ。この書によって、農政学が含む世界的視野と、それが民間のもっとも小さなものへの関心にも応えなければならぬ学問であることを、柳田は共感をもって理解したと橋川はいう [橋川 1985 280]。その後、柳田と新渡戸とは書簡のやり取りをするようになる。新渡戸に送った柳田の著述「中農養成策」に対する新渡戸の礼状が残されており、内容からして1904（明治37）年に差し出されたものと藤井隆至はみなす [藤井 1993 246]。とはいえ、この時点では二人はまだ、直接会ってはいない [小田 2019a 7]。

両者が実際に対面的な関係を切り結ぶようになったのは、1907（明治40）年2月まで待たなければならなかった。報徳会第二回例会で柳田は新渡戸の講演「地方（じかた）の研究」を聞き、その提唱する地方学に強い印象を受けたのである。講演前には新渡戸も交えて食事をしているのでこの折、たしかに二人は言葉を交わしただろう [小田 2019b 50]。

「地方の研究」は、より講演時に近い口語体でまず、報徳会の機関誌『斯民』の第2編第2号（1907年）に掲載されている。当時、報徳会と柳田の縁は深かった。柳田は1906（明治39）年1月に掛川の報徳本社を視察し、「報徳会と信用組合」を講演 [小田 2019b 44]。同年、報徳

会が機関誌『斯民』を創刊すると、その第1編第1号の「会告」にも柳田の名前が載る。同誌の掲載事項と分担者の欄で、「経済及産業ニ関スル事項」に「法制局参事官 柳田國男」とあるのだ。翌1907（明治40）年の第2編第4号には「報徳会夏期講演会」の予告がある。そこには講演予定者として柳田と新渡戸の名前が並んでおり、共に行動するようになったことがわかる。二人の出会いに報徳会という場が寄与したことは間違いあるまい。

2.2 「地方の研究」と自然主義的視点

柳田は「地方の研究」のどこに感銘を受けたのか。いくつか考えられる。一つは経世済民への志向性である。新渡戸は近代文明に対置される「地に根ざした文化」の拠点として、地方を位置付けた。そのための地方学は、農村の救済という実践性を内包した経世済民の学を目指すものとなった〔並松 2011 64、芳賀 1972 70〕。その点で経世済民を学問の目的と唱える柳田と相通じる。

次いで地方を対象化するにあたっての自然主義を思わせる新渡戸の観察眼である。「地方の研究」では、その方法について、以下のように新渡戸は説く。

田舎に対する趣味と同情とを養ふて、諸君と共に之を科学的に研究せんと欲するのである。即ち彼の生物学者が顕微鏡を以てバクテリアなどを研究するやうに、其方法を藉りて之を社会学に応用して見たい。（中略・引用者）一村一郷の事を細密に学術的に研究して行かば、国家社会の事は自然と分る道理である〔新渡戸 1970a 180〕。

顕微鏡で見ると社会をとらえる上記のような観点を、新渡戸自身は自然主義的なものとみていたかは定かではない。自然主義とは当時、文学的手法として受け止められていたからである。だが、この時期の柳田は自然主義的方法を強く意識しており、その問題関心から新渡戸の話を受け止めた可能性は大きい。たとえば1908（明治41）年の「読者より見たる自然派小説」の一節にはその自然主義観が読み取れる。

自然主義の小説に第一に有りがたいと思ふ事はあの人物事象の取り扱ひ方で、それが恰ど花卉草木や鳥や虫などに対するやうな、言はず超然たる態度で取扱つてをることである。

その人物事象の中へ捲き込まれて了はずに、鳥渡離れてみてゐる態度である〔柳田 2006 572〕。

新渡戸が言う顕微鏡で研究するように、という姿勢はここでいう対象に距離を置き、客観的に「超然たる態度」で臨むという方向と重なり合う。大塚英志は、「社会」や「習慣」は柳田にとって「第二の自然」であり、自然主義的な観察と記述の技法の対象とすべきだとしていた、という。そして人々がそうした技術を習得することによって、「公共性の抛り所」の変遷と現在の姿が確認でき、新たな公共性が可能となると柳田は考えていたとする〔大塚 2014 75〕。自然主義を文学の範疇だけではなく、社会の観察にまで及ぼしてその改革につなげるという柳田の考えの嚆矢が、先程の引用箇所からは読み取れる。

2.3 新たな共同性への模索

柳田は新たな公共性を模索していた、と大塚はみる。しかし、こうした問いを抱いていたのは、なにも柳田だけに限らない。同時代的要請でもあったのだ。それは特に青年層にとって、切実な問題だった。日露戦後、多くの青年が国家や社会との接点を見失い、一方では物質的な利益を追求することをためらわなくなる。他方で人生いかに生きるべきかという自我の問題に

悩む、いわばばらばらな砂粒のような個へと分解されていく。自己と国家や社会の関係はもはや自明ではなく、改めて発見し直さなければならなくなる [有馬 2013 25]。新たな公共性という問いも、その射程に収まる問いの一つだ。

ただし柳田が当時念頭に置いていたのは、青年層ではなかった。農民である。農政学を修めていた柳田は大学を卒業後、農商務省農務局農政課に勤務。そこでの仕事のひとつが、産業組合法に依拠した産業組合の普及と指導であった。

柳田はこの間、産業組合法全 90 条を解釈した著作『産業組合』を刊行している。同書には「同心協力」「合同協力」「協同と自助」「対等の人が相結び互に助けて」といった表現が多くみられることに藤井隆至は着目する。産業組合法という法律自体には、「共同相助」等々の単語は見出せない。産業組合法は、組合員の倫理について実のところ、何も規定していないのだ。協同組合は組合員の自助と共同の精神によって運営されるべきだという見解は、「法の精神」にしたがって柳田が付け加えたものだと藤井はいう。「共同相助」という論点が別途提示されたのは、その必要があると判断したがゆえに、である。なんとなれば産業組合法は存在するものの、個人の間での「共同相助」の倫理は不十分なままだったからである。それがゆえに、そうした新たな倫理に基づく共同性をつくりあげていく必要があったと柳田は考えた [藤井 2008 86-87]。

時代に適した共同性への模索は、新渡戸稲造にしても同様だ。その模索の具体化として、新渡戸と柳田が柱となった郷土会は位置づけられる。

3. 郷土会とその意義 ソシアリティと学歴の均一性

3.1 サロンとしての郷土会

大正期に入って新渡戸が主催者となり、柳田が幹事役を担って発足したのが郷土会だ。会は 1910 (明治 43) 年から 1919 (大正 8) 年まで、新渡戸邸を主たる会場として続けられた。柳田の回想によれば、その発足の経緯は次のようなものである。

明治四十三年の秋ごろ、新渡戸稲造博士を中心に郷土会を創立したが、その定例会員は石黒忠篤、木村修三、正木助次郎、小野武夫、小田内通敏、牧口常三郎などという人たちであった。(中略・引用者)

「郷土会」のもとになったのが、「郷土研究会」という集まりで、明治四十年か四十一年ごろ、私の家で始めたものである。そこへ新渡戸博士が西洋から帰ってこられたので、後には新渡戸先生のお宅に伺うようになった(中略・引用者) 話題のもとには会員各自の旅行の報告で、いちばん熱心だったのは早稲田大学の小田内通敏君であった [柳田 1997a 241-242]。

会の発足当時、柳田は法制局参事官で、1914 (大正 4) 年に 40 歳の柳田は貴族院書記官長に就任している。著作でいえば『後狩詞記』、『石神問答』、『遠野物語』、『時代ト農政』を相次いで刊行した時期にあたる。他方、新渡戸は第一高等学校校長と東京帝国大学法科大学教授を兼任する一方、『修養』や『世渡りの道』といった啓蒙書のベストセラーを立て続けに出していた。

双方ともに多忙極まりなかったはずだが、それでも会が続いたのはその雰囲気によるところが大きかったのだろう。ふたたび、柳田の回想から。

先生のお宅では毎回会費五十銭をおさめて、そのころとして二円か二円五十銭くらいのごちそうをして下さった。名ばかりの会費をとって、来客の面目を害しないように心づかいして下さったのである。場所もよく、そのうえ本もたくさんあり、ごちそうも出て、楽しい会であった [柳田 1997a 242]。

楽しい会であったことは確かであろう。しかし、ここにたんなる楽しさだけを見て取っては、新渡戸の意図を見失いかねない。そこでその雰囲気作りは、どのような趣旨でなされたのか。山下紘一郎は、新渡戸が郷土会を「郷土」に関する多方面の智識について自由に交換し得るサロンに育て上げようとした、とする [山下 1988 401]。

3.2 新渡戸稲造のソシアリティ

たしかに郷土会は多様な経歴の人々が集うサロンともいべき雰囲気の間だった。しかしそれはサロンという言葉が時として帯びる一過的な、あるいは有閑的なイメージとはおよそほど遠い。その根底にあったのは、新渡戸のソシアリティ（社交性）重視の精神であり、ことあるごとに新渡戸はその重要性を論じている。

たとえば 1906（明治 39）年、第一高等学校校長の新任挨拶の席上で、高校生は自己の内面的世界に関心を寄せることは大切だが、同時に広く社会に積極的にかかわることも重要だ、と新渡戸は説く。それを踏まえて、これからの日本を背負って立つ青年には、知・徳・体に相当するバイタリティ（活力）、メンタリティ（知性）、モラリティ（品性）だけではなく、ソシアリティ（社交性）が必要だと強調した [草原 2021 238]。

明治 17（1884）年に生まれ、一高から東京帝大法科大学卒業後まで新渡戸の教えを受けた後、内務省、朝日新聞論説委員、貴族院議員、戦後は文部大臣を歴任したのが前田多門だ。前田の回想では、一高校長の新渡戸は学校の近くに一軒、家を借りて週に一度生徒に解放し、塩せんべいと洪茶で胸襟を開いて談笑したという [前田 1936 186]。そこにあるのは郷土会同様、新渡戸のソシアリティ重視の精神だろう。そうした新渡戸の姿勢が強い印象を前田に与えたことは、次の一節からも明らかだ。

新渡戸先生が、当時一高校長としてのみならず、それこそ、当代随一の社会教育家として、機会あるごとに強調せられたのは、縦の関係の外に、横の関係の重視すべきこと、即ち、水平的に、各人が相寄り相携へて、善き社会を作らねばならぬ。日本人の教養にこれまで欠けて居り、こん後涵養の急務なるを感ずるのは、社会性（ソーシアリティ）であり社会奉仕であるという点であった [前田 1963 15]。

「水平的に、各人が相寄り相携へて」というのは、まさに郷土会のあり方そのものに他ならない。新渡戸は一高生、すなわち学歴エリートを前にソシアリティの必要性を訴えたが、しかしそれだけに止まるものではなかった。より広い層に対して新渡戸は様々な機会に修養について論じたが、そこでも同じ姿勢を貫く。一般向けの経済雑誌『実業之日本』誌上に新渡戸は啓蒙的な記事を数多く寄せ、1911（明治 44）年に『修養』という一冊にまとめると一躍大ベストセラーとなる。その翌年、続けて刊行した『世渡りの道』の一節を見よう。そこには「斯く人間が協同生存せんとする性質をソシアリチー（共同生存する性質）と称し、人類をして今日の程度に発達せしめた最高の性格」 [新渡戸 1970b 113] だとあり、一高生同様にソシアリティの重要性を説く。

「社交性」「社会性」「共同生存する性質」等、時と場合によってソシアリティに充てられる日本語は異なるが、その含意は皆、共通する。それは個人と国家との間にある中間集団の重視であり、そこから自治制度の発展という問いへと射程が広がる。「地方の研究」を新渡戸が提唱して地方の制度や風俗習慣の研究を重視したのも、自治制度発達のためだったと山本慎平はいう [山本 2015 59]。ソシアリティはその意味でも新渡戸や柳田の思想を理解する上で、欠かせ

ない言葉だ。地方の研究という方向性を共有する郷土会は研究対象、またそのための組織のあり方いずれもが中間集団としての可能性を模索するものだったのである。郷土会がはらむサロンの性格は、そうした脈絡から位置付けなければならない。

縦の関係ではなく横の関係を重視するという姿勢は、柳田にとっても新渡戸と同じくするものだった。長浜功はそれに対して、「サークル的人間」という言葉を与えている。柳田は生涯にわたり多くの集団を主体的、あるいは自発的に作っていった。長浜が柳田の年譜から拾い上げた会について、郷土会が発足する前までのものを見ていこう。期間は 1896（明治 29）年から 1907（明治 40）年まで、柳田が 22 歳から 33 歳にかけての時期となる [長浜 1994 292-294]。

紅葉会 文学会 清和会 土曜会 雑談会 三々会 イプセン会 龍土会

以上は当時の柳田の関心からしてすべて文学関係の会となるが、柳田にとってこうした会の延長線上に郷土会が位置していることを見て取るのはたやすい。そして郷土会以降、今度は民俗学関係の会を次々と立ち上げてゆく。いずれもが学会という縦の組織とは違い、横の関係に根ざすものである。その意味で、柳田もまたソシアルティ重視の精神を根底に抱いていた。

3.3 学歴という断層

だが、その一方で新渡戸と柳田双方の組織論を分かち大きな違いにも、ここで目を向けたい。それは参加者の学歴、という点だ。柳田が当時、交友が深かった文士、たとえば田山花袋、島崎藤村、蒲原有明、泉鏡花いずれも大学卒ではない。学歴に依拠しない人脈形成は、その後の柳田の交友を特徴づけていく [鶴見 2019 37]。

それは郷土会に参加した人々の学歴と照らし合わせると、一層際立つ。郷土会のメンバーは、途中から貴族院書記官長に転出した柳田から、小学校校長の牧口常三郎まで、官等でいえば非常なばらつきがあった。年齢にしても旧幕臣・山中共古が 1850（嘉永 3）年生まれで最年長、他方現役の大学生であった辻村太郎は 1890（明治 23）年生まれと開きは大きい [鶴見 2002 97]。

参加者は実に多様にみえる。だが、学歴という視点から見ると、様相は一転する。鶴見太郎は郷土会の主要メンバーの氏名、生没年、出身、学歴、出席当時の肩書について、27 名分、一覧を作成している [鶴見 2001 165-166]。年齢順でいえば先程ふれた 1850（嘉永 3）年生まれの山中共古が最年長、他方 1897（明治 30）年生まれでまだ慶應義塾の予科学生だった松本信広が最も若い。会員相互の年齢幅はほぼ 50 年の長きにわたるほど、幅広い。

しかし各人の学歴に目を移すと、年齢幅ほどには差が見られない。ひときわ目を引くのが 27 名中、実に 16 名が東京帝国大学卒業の肩書を持つ点だ。出身は農学科（有馬頼寧、石黒忠篤、木村修三、小平権一、那須皓）、動物学科（小野俊一）、植物学科（草野俊助）、農芸化学科（中村留二）、植物学選科（三宅驥一）、地質学科（辻村太郎）、法科（小平権一、前田多門）、政治学科（日高信六郎）、言語学科（後藤朝太郎）、独文科（高木敏雄）、哲学科（十時彌）と実に多様で、卒業者が 5 名いる農学科以外、その専攻する分野にはほとんど共通点は見いだせない。その意味で郷土会の参集者には、サロンの多様性がうかがえる。だが、東京帝国大学卒という、学歴のヒエラルキーでいえば最上位の資格を得ていることに、皆変わりはない。

東京帝大卒ではなくとも、ブリュッセル大学地理学科卒の田中阿歌麿、東京専門学校文科卒の中山太郎、東京高等師範学校地歴専修科卒の小田内通敏等、メンバーの大半が高等教育機関を経ている。

逆に中等教育程度で学歴を終えたものは、数えるほどにすぎない。鶴見の示した一覧からい

えば、尋常中学校卒の野村八良、尋常師範学校卒の牧口常三郎等に限られる。牧口の場合は、小学校教師として、あるいは地理学者として刊行した『人生地理学』が新渡戸の目に留まり〔鶴見 2002 77〕、郷土会への参加につながったのだろう。その牧口について、後年柳田は「もうそのころ既に五十歳に近く、余り無口だったから人から愛せられなかった」〔柳田 1997a 346〕と振り返っている。学歴エリートたちの中にぽつんと一人いる自らの立ち位置が、牧口を自ずと無口にさせたと見てもおそらく間違いではあるまい。

新渡戸はソシアリティの重要性を唱え、その実践のひとつとして多士多才が集う沙龙的な郷土会を立ち上げたのは確かだ。だがその一方で、郷土会参加者の多くが東京帝大卒であり、学歴による見えない境界線が引かれていたことを見落としてはなるまい。次に述べるように、学歴の断層を横断しようとした柳田と郷土会のあり方とは、ここで大きくたもとを分かち。

4. 学歴を横断する「運動」としての雑誌

4.1 『郷土研究』創刊と誌面構成

貴族院書記官長に就任する前年の1913（大正2）年、柳田国男は高木敏雄と共に雑誌『郷土研究』を創刊する。郷土会に参加しているさなかの事である。それは新たな学知への胎動を告げるだけでなく、学歴を横断して知をどのように共有していくのか、という「運動」としても位置付けられるものとなった。それは『郷土研究』に限らず、柳田がその後かかわるいくつもの雑誌にも通底する性格となる。

雑誌というメディアが、いかに運動へと連動していくのか。そのあたりをいち早く論じたのが、大月隆寛だ。柳田は「問答」という形式に執着した思想家だった、と大月はいう。そうした相互的なやりとりが可能となる「場」として柳田は雑誌を位置づけ、「問いかけ」に対する「応答」という形での交通が、雑誌というメディアを媒介にして成立し、それが柳田の方法を支えていた、とする。『郷土研究』誌上でいえば、「紙上問答」欄がそれに該当し、読者が雑誌に質問を投稿し、それに対して別の読者が回答を寄せる、という形式が誌上の問答を形作ってゆく〔大月 1997 51-54〕。柳田にとって、雑誌の主催は読者としての研究者を組織していく実践だけではなく、全国に散らばる同士に発表と問答の場を設定するテクノロジーであったという指摘も、柳田の雑誌観を端的に示すものといっている〔佐藤 2015 10〕。

読者同士、あるいは編集者と読者相互を巻き込む新しい雑誌を創るにあたって、柳田は南方熊楠に意見を求め、イギリスの“Notes and Queries”を紹介されている〔鶴見 2019 114〕。同誌に何度となく寄稿していた南方は、柳田に「文学、考古学、里俗学の範囲において、各人の随筆と問と答えを精選して出すこととしたら、はなはだ面白かるべしと思う」（1911年6月12日付）と書簡で伝えているのだ〔飯倉編 1976 44〕。

この『ノーツ・アンド・クエリーズ』とは、イギリスで1849年に創刊された週刊の投稿形式の学術雑誌である。誌面は「短報」であるノート、「質問」にあたるクエリー、それに対して読者が返す「回答」すなわちリプライからなる。同誌は知識の交換と総合化の場として機能し、南方熊楠は英文で総計ノート71本、クエリー63本、リプライ250本もの寄稿を果たしていたので〔志村 2013 69・73〕、柳田から意見を求められるとすぐにこの雑誌が参考になると判断したに違いない。様々な知識を交換し、総合化を目指す同誌のあり方は、柳田が『郷土研究』で模索した誌面構成の方向性を決定づけたと見て、間違いあるまい。

4.2 新渡戸稲造にとっての雑誌というメディア

新渡戸稲造にとっても、雑誌というメディアは重要な意義をもった。すでに述べたように、『実業之日本』誌上に寄せた文章を一冊にまとめた『修養』や『世渡りの道』は、当時の大ベストセラーになったのである。しかし、雑誌のメディアとしての活用法は、柳田のように読者を誌面に巻き込むことは念頭にはなかった。

新渡戸稲造が『実業之日本』を刊行する実業之日本社の編集顧問に就任したのは、1909（明治42）年。その前年から同誌に「新時代に処する実業家の武士道」を掲載し、以後毎号寄稿するようになっていた。第一高等学校校長としての新渡戸は、エリートを相手にした教育者であったのに対し、同誌の読者に向き合う新渡戸は非エリートを相手にした教育者としてふるまった〔実業之日本社社史編纂委員会 1997 53-55〕。

なぜ新渡戸は編集顧問に就任したのか。新渡戸自身は、次のように述べている。

中学を半端退学したり又は中学の教育さへも受けられなかった人々を教育し、その観念を改めさせることは今日最も必要なことと思ふ。（中略・引用者）学問を修めることのできなかった人に学識と徳藻とを涵養させる機関がない。（中略・引用者）僕が今回顧問となったのも、この雑誌を通して、学問のない人に学問を与へ煩悶して居る人に、慰安を与へたいという事が第一の理由である〔新渡戸 1970c 682〕。

ここからうかがえるのは中学校卒業を基準として、それを満たさない人びとを読者対象とするという新渡戸なりの判断である。郷土会が主に東京帝大卒の集まりであったのとは、対照的だ。とはいえすでに見たように、啓蒙的著作『世渡りの道』でも一高生を相手にするのと同様、新渡戸はソシアリティという言葉で自説を展開していた。日本ではエリート文化の中核となる教養主義と大衆文化の中核となる修養主義とが、明治後期に「修養主義」として同時に同一物として成立したと筒井清忠はいう。教養主義が修養主義から分離して、エリート文化として自立してくるのは大正期に入ってからとなる〔筒井 1995 33・49〕。新渡戸のソシアリティという用語法からは、教養主義と修養主義とが混在していた当時の状況が浮かぶ。

とはいえ、他方で両者の間での使い分けを新渡戸がしていたのも確かである。高学歴者層に対してはソシアリティを唱えるだけではなく、それと対応した対面的な場を新渡戸は積極的に設けた。郷土会はその一例だ。しかし、『実業之日本』で向き合ったような中等教育未満の学歴者層に対しては、それはない。

新渡戸が編集顧問就任のいきさつを述べた一節には、同誌の発行部数が毎回8万部に上るとある。端的に言って、これだけ多くの人と対面的な場を設けることは現実的ではないだろう。しかし、明治以降、『穎才新誌』から始まるいくつもの投書・投稿雑誌が現れ、読者の「公共圏」が作り上げられていったこともたしかである〔紅野 2003〕。にもかかわらず、『実業之日本』誌上には読者の投稿欄はない。編集サイドと読者、読者相互をつなぐ回路付けの方向性は誌面からはうかがえず、そこにソシアリティを具体化しようとする意図は見えてこない。

新渡戸の教育論では相手の学歴にかかわらず「修養」を説いてはいるが、しかしその実践の場面では相手の学歴に応じて対応は一様ではない。その意味でそれは階層の差異を解消するのではなく、逆に固定化の方向で作用していたとする伊藤敏子の論は、説得的だ〔伊藤 2015 337〕。大正期に入って修養主義から教養主義が分離していく一因は、新渡戸自身の「修養」の使い分けにあったとあっていい。

4.3 学歴を横断する知の形式

雑誌をどのように活用するか、という点で柳田は新渡戸とは正反対の姿勢をつた。編集者と読者同士をつなぐという柳田の雑誌の編集方針は、学歴という分断を超えた「野の学問」を志向するものとなった。柳田の南方宛書簡からは、そうした意図が端的にうかがえる。『郷土研究』への南方の原稿に対して、柳田は「どこまでも文を平易にして学校教員などにも見せたく候」[飯倉編 1976 326]と注文しているのは、その一例だ。教員といっても、中等教育を担う教員には帝大卒もいた。柳田が念頭に置いたのはそうした層ではなく、おそらく初等教育のそれであろう。小学校教員は給与面、待遇などから当時は「貧しい半専門職」[竹内 2011 190]として遇されていた。それがゆえに平易な文章を通して「共通の研究心をもたせ、この学問の進歩を促したき」[飯倉編 1976 323]と柳田は綴ったのだろう。

そうした学歴を横断する知のあり方がはらむ可能性を、柳田はどのように見いだしたのか。一つ考えられるのは、柳田が『後狩詞記』(1909年3月刊)、『石神問答』(1910年5月刊)、『遠野物語』(1910年6月刊)の3冊を上梓するにあたって得た手応えだったのではないか。

これまでの学史によれば、『後狩詞記』は椎葉村で聞いた事をまとめた、いわば民俗調査報告書ともいうべき内容として位置づけられ、民俗語彙をカタカナ書きで記すとといった後の資料処理の基準がすでにここには見られる点が強調される。また『遠野物語』は柳田が佐々木喜善の語る所を書き留めるといふ民俗調査の方法を実践したという点で、いずれも民俗学の出発点とする位置づけ[福田 2009 68-72]は、たしかに妥当だ。

しかしそれだけではない。この3冊は著者名が付された一般的な書籍とは、およそ異なった形式でまとめられているのだ。『後狩詞記』について、後年柳田は「余が出版事業」でこう回顧している。同書は「実は又私の著書では無く、日向の榛葉村の村長の口授を書写、それに或旧家の獵の伝書を添へて、やゝ長い序文だけを私が書いた」[柳田 2003 235]に過ぎないのだ。実際、その初版本の本文 67 ページのうち、48 ページは椎葉村長・中瀬淳の手になる資料で、柳田自身の執筆は序文 19 ページだけ、全体の3割にも満たない[牛島 1993 210]。『石神問答』は石神と呼ばれる神について、柳田と山中共古、白鳥庫吉、佐々木喜善ら9名の間で交わされた書簡を一冊にまとめたもの。著者名義は柳田となつてはいるが、実際にはこの9名の共著といった方が正確だ。『遠野物語』にしても、柳田が佐々木喜善に聞き書きしてまとめたという意味で、柳田自身「是も精確には私の著書といふことが出来ない」とする[柳田 2003 236]。

そういった意味でこの3冊いずれもが、およそひとりの著者が自身の意向によって全体をまとめる、といった一般の著書の形式をとらない。ある意味、共著ともいうべき形式となる。大塚英志はそこに柳田の方法意識の反映を読み取る。当時、自然主義小説が急速に「私小説」化していく時代に、あえてこうした「私」を一歩退けた形式をとって「私小説」への対抗をめざした、というのだ。したがってそこに資料の収奪者としての柳田を見出してはいけなく、とする[大塚 2007 153]。柳田自身が後に『後狩記』や『遠野物語』について、正確には自身の著ではないと明言していることを考えると、大塚の指摘は妥当なものといつていい。

4.4 『後狩詞記』での中瀬淳との出会い

当時の自然主義文学への対抗意識と合わせてこの3冊に共通するのは、紙面を通して相互に知を共有していく仕掛けが施されている、という点だ。宮崎靖士はこの3冊いずれもが構成面で共通するという。それは冒頭に分量的な比重としては低い「编者」の言葉、もしくはその作

業の結果とみなせる部分と、分量的にはテキストの大半を占める資料紹介的な部分との2つからなる、という点だ。たとえば『後狩詞記』でいえば、前者が柳田による序文、後者が中瀬淳からの資料提供部分がそれに該当する。宮崎はあえてこうした構成をとらなくても、それぞれの著作はまとめることもできた、と指摘する [宮崎 2012 2]。

たしかにそうなのだ。『後狩詞記』にしても、中瀬から寄せられた資料に柳田が全面的に手を入れて自らの著作とすることも十分、可能だったはずだ。しかし、柳田はそうはしなかった。宮崎はあえてこうした構成をとることによって、編者が提示する情報だけでテキストの理解を完結させるのではなく、個々の読み手の参加を促すような働きかけが可能となる、とする [宮崎 2012 16]。ここでの構成は、単純に柳田の問いかけとそれへの応答というものではない。しかし後に柳田が『郷土研究』誌上で展開したような「紙上問答」ともいべき構成と相通じる面があるのも、たしかだろう。そうした知を相互に共有していく「野の学問」の萌芽として、『後狩詞記』からの3冊は位置づけられる。

さらに言えばこうした構成を可能とさせたのは、柳田がこの3冊で出会った人々いずれもが持つ、学歴の程度にかかわらず資質の高さに気付いたから、とも考えられる。たとえば『後狩詞記』では、中瀬が柳田に送った「狩猟の話」をほぼそのまま収録していた。柳田は言いまわしなどに若干、手を入れた程度にすぎないことは、中瀬が提供した資料と『後狩詞記』本文とを対比して検証した千葉徳爾の作業でも明らかだ [千葉 1985 208-218]。

そうした中瀬の文章に対して柳田は補注で「中瀬氏の文章。野味ありて且つ現代の味あり。其一句一字の末まで。最も痛切に感受せられ得と思ふ」 [柳田 1999 455] とコメントしている。一見、何気ない一文だが、実はこの一節はほぼ『遠野物語』の序と重なっていることを見落としてはならない。柳田はそこで「一字一句をも加減せず感じたるまゝを書きたり」 [柳田 1997b 9] と記しているのだ。表現には若干の違いはあれど、内容という点で違いはさしてない。

「感じたるまゝ」というフレーズは当時、柳田も含めて自然主義文学者の間で、写生文の方法を示すものとして多用されていた。それを踏まえて大塚英志は、この一文こそが『遠野物語』が自然主義的な「写真」的方法の自分なりの実践だとする柳田のマニフェストだという [大塚 2007 39]。それを踏まえると先程のコメントからは、自然主義文学におそらくふれたことがない、しかも19歳で村役場書記になっていることから高等教育にも無縁だったはずの一僻村の村長が、自らの文学上の実践と変わらぬことを成し遂げている、という驚嘆の念が読み取れるのではないか。「野の学問」の可能性を柳田はここに確信したに違いない。

4.5 『石神問答』が開いた知の可能性

『石神問答』にしても、柳田が書簡をやりとりした相手の経歴をみると、高等教育を享受していない者が半数ほどいる。書簡での相手は年齢順に、神風連の生き残りで八代の健軍神社祀官の緒方小太郎 (1844年生)、牧師、民間学者の山中共古 (1850年生)、東洋史学者・白鳥庫吉 (1865年生)、遠野の人類学者・伊能嘉矩 (1867年生)、考古学者・和田千吉 (1871年生)、喜田貞吉 (1871年生) の6名が1875年生まれの柳田より年長、柳田の実弟で画家の松岡輝夫 (1881年生)、佐々木喜善 (1886年生) が年少となる [石井 1999 798]。

緒方や山中は、近代の高等教育が成立する前に青年期を迎えている。近代の教育制度がある程度整った後に生まれた者で正規の高等教育を受けたのは白鳥と喜田、そして弟の松岡の三人だ。喜田は第三高等中学校文科を経て帝国大学文科大学卒業。白鳥は第一高等中学校の後、同

じく帝国大学文科大学卒業である。画家の松岡輝夫は東京美術学校日本画科卒で、その経歴は先の二人とは全く異なっているが高等教育を経た点で変わりはない。

他方、それ以外をとると、その学歴はおおむね不規則なものだ。伊能嘉矩は19歳の時に上京し二松学舎に入学したものの、学資に窮して岩手県師範学校に入り直し、その卒業を待たずに再度上京し、東京人類学会で坪井正五郎の指導を受けている〔岩崎 1983 112〕。和田千吉は兵庫県立姫路中学校に入学するものの、その翌年に上京して実学塾英学校、後に日本英学館に転校したとするが、その後の消息は年譜にはない〔浅田 1976 231〕。やはり東京人類学会に入会しているので、伊能ともども柳田とそこで面識を得たのかもしれない。佐々木喜善もすでに述べたように上京して高等教育に接してはいるものの、卒業はしていない。

最年長の緒方小太郎と最年少の佐々木喜善の年齢差は40歳以上、ある。その差は近代教育制度の整備以前と以後の世代とを分かつ。さらに制度が順次、整備されてからは高等教育を修了したか否か、という違いが生じる。そこにある幾重にもわたる学歴の断層の深さは、かなりのものだ。しかし『石神問答』での書簡のやり取りは、そうした分断よりも互いが横断しあい、そこに新たな学知が展開する可能性を柳田に深く印象付けたのではないか。

郷土会では一見多様な経歴を持つようにみえた参加者であっても、内実は学歴による境界線が強固に引かれていた。しかしその文章が柳田を瞠目させた『後狩詞記』の中瀬淳や、『遠野物語』での佐々木喜善との出会い、また『石神問答』での書簡のやり取りを通じて、学歴という境界線を超えて相互に知を交歓する「野の学問」を柳田は予感したに違いない。その予感は次なる『郷土研究』の創刊で大きく実を結ぶ、はずだった。

5. 『郷土研究』の迷走と挫折

5.1 「共同研究の機関」のための仕掛け

1913（大正2）年、高木敏雄と共に創刊した『郷土研究』は、柳田にとってその後も続くいくつもの雑誌への関与の出発点となった。読者同士、あるいは編集者と読者相互を巻き込むための試みは、創刊号からすでに形を成している。

その意図がたしかなものであることは、創刊号末尾の「謹告」からもうかがえる。3点あるポイントのうち、2つまでが読者相互の交流を促すものとなっているのだ。一つは「問答欄を設けて読者相互の意見の交換をはからんことを期す」、今一つは「本誌の目的及び事業の賛助者たる愛読者の為に全紙面を開放し、各種の研究論文随感随筆、特に資料及び報告の寄稿を歓迎し同趣味者共同研究の機関たらんことを期す」。欄の左には原稿の送付先も明記されており、準備も万端だ。

創刊号には早速「紙上問答」と題して柳田や高木敏雄による問いが計6つ、掲載されている（61ページ）。また「小編」や「資料及報告」欄もあり、さながら『ノーツ・アンド・クエリーズ』の日本版といった体裁である。さらに資料の収集が始まったばかりという事情を反映してか、同誌には「地方誌未刊書目稿」欄も設けられた。各地の未刊の地誌に関する情報を収集し、その共有を図ることがねらいだ。まさに「共同研究の機関」となるべく、柳田が尽力する姿が『郷土研究』誌面からは如実に伝わってくる。

様々な題目を考え、あの手この手で読者を誌面への投稿に誘う試みは、その後も続く。第4巻第1号（1916）からは新たに「方言」欄が登場。「方言の研究に興味を有つて居られる人々が中々多いやうだから新たに此欄を設けた。誰でも飛入り勝手次第の寄合ひ話をして見たいと思

ふ」(58 ページ) と、気軽に読者が投稿できるような配慮を柳田は示している。

同じ号にはさらに「小通信」欄を掲載しだす。これは質問ばかりが増えた半面、回答が減った「紙上問答」を中止しての代替措置だと柳田はいう。合わせて「読者交詢の必要」と題して「今後も成るたけ盛に読者同士の通信をして貰ひたいと思ふ。(中略・引用者) 此欄を変化のある自由な雑談会として置きたいのが編輯者の目的」(63 ページ) だと、雑誌の任務を改めて謳う。実際、小通信欄を見ると1行あたり25字で、短いものは5行125字、長くても10行250字程度の報告が並ぶ。はがき1枚に収まるほどの字数なので、読者も投稿しやすい体裁だ。

『郷土研究』刊行から4年目を迎えても、柳田が同誌に寄せる読者への期待は変わらない。柳田が構想する「野の学問」の輪郭の一端が、ここからはうかがえる。雑誌というメディアに対して「情報のデータベースとなることをイメージし、その上で問題系を共有していく社会的なネットワークを可能にし、かつ、可視化する場として考えていた」という大塚英志の指摘[大塚 2014 164] は充分、首肯できるものだ。

5.2 近代郵便制度が可能とさせた知の交歓

それを支える社会的インフラとして、近代の郵便制度の展開が大きな役割を果たしていたことにここで目を向けておこう。そもそも柳田は何故読者からの投稿を柱とした雑誌を構想したのか。『ノーツ・アンド・クエリーズ』の存在が大きかったが、それだけではない。南方熊楠をはじめとして多くの人々と書簡をやりとりした自身の経験も、見逃せない。『郷土研究』創刊前に刊行した『石神問答』は、すでに述べたように柳田を軸として交わされた書簡を一冊にまとめたもの。柳田からすれば、それを雑誌形式にしたのが『郷土研究』だったのではないか。

それを可能とさせたのが、書簡の往来にかかるスピードだ。当時、郵便物が相手のもとに届く日数は、今から見ても予想以上に速い。後述する『郷土研究』誌の方向性に対する南方の批判と柳田の弁明のやりとりを、例にとろう。1914(大正3)年のことである。南方からの手紙を受けて柳田が返答した日付は同年5月12日。それに対して南方は14日午前3時に書いた長文の書簡を送り、さらに柳田はそれへの反論を16日に記し17日に投函。これに南方が答えたのは19日付書簡で、柳田は22日付の書簡を送ってとりあえず交信は終わる[飯倉編 1976 372]。

わずか11日ほどの間に互いに相手の文面を読んだ上で、南方は2度、柳田は3度も書簡を送っている。それだけ当時の郵便物が届く日数は速かった、ということだ。そのスピード感があったからこそ、読者相互の誌面での交歓に対して、「寄合ひ話」「雑談会」といった対面的なたとえを柳田は用いたとも考えられる。

南方が当時住んでいたのは、和歌山県の田辺。田辺は交通の便でいえば、東京からは僻遠の地といってもいい場所だった。民俗学関連の書を数多く手がけた岡書院の岡茂雄は、南方の著作刊行の許可を得るべく、田辺まで足を運んでいる。1926年(大正15)のことだ。その道のりといえば、まず東京から長い汽車旅を経て大阪に行き、南海電車に乗り換えて和歌山へ、そこから新和歌ノ浦で汽船に乗船して田辺によりやく着く。東京を朝出発しても田辺に到着するのは夜遅く。一日がかりの行程だったのだ[岡 1974 25]。

そういった地であっても、郵便物は何日もかからずに届く。当時、全国に張り巡らされていた郵便のネットワークが迅速に機能していたことが、柳田と南方の書簡のやりとりからは浮かび上がる。そうした社会的インフラの整備が読者の投稿を全国から求める『郷土研究』のあり方を支えており、だからこそ編集者と読者、読者同士をつなぐメディアとしての機能が十全に

果たせたのだ。

5.3 郷土会メンバーとの距離感

だが、『郷土研究』誌上を見ると、他方であることに気づかざるを得ない。「郷土研究」と銘打ちながらも、郷土会メンバーの参加がほとんどといってよいほど、見られないのだ。『郷土研究』雑報欄には、創刊号から柳田による郷土会の例会記事があり、その掲載は以後も続いて郷土会の動向が毎号のように誌面から読み取れるのは確かだ。メンバーの原稿もあるにはある。たとえば第1巻第11号(1914年)の石黒忠篤「湯坪村と火焼輪知」、第3巻第10号(1916年)の新渡戸稲造「桜島罹災民の新部落」はその一例だ。とはいえ、こうした論考は自身の新たな書き下ろしではない。郷土会席上で柳田が概要を書き留めたものをほぼそのまま転載したことは、柳田による『郷土会記録』での該当ページの記述とほぼ同一であることから明白だ〔柳田編 1925〕。郷土会のメンバーは『郷土研究』に自ら積極的に関与していたわけではない。

郷土会での報告や調査は、はたして柳田が模索する学知の方向性と乖離していたのだろうか。『郷土会記録』に収められた各人の報告を見る限り、そうではないことが伝わってくる。

『郷土会記録』にある石黒忠篤の1912(大正元)年の報告を、一例としよう。当時石黒は28歳、農務局事務官の少壮気鋭の官僚だった。その報告「豊後の由布村」は、自身が由布村に宿泊して「夜分村老と会談し、色々昔の話を聞いた」もの。長さは6ページほどだが、村の起源、生業である狩猟、山の神の祟り、温泉を利用した鯉の養殖、山林の入会関係等にふれている〔柳田編 1925 34-39〕。昭和に入ってから柳田は「山村調査」という名目で、全国各地での調査を主導した。石黒の報告はそこでの成果の一端とみなしても、ほとんど違和感がない。石黒に限らず、たとえば那須皓の「代々木村の今昔」は、村落の資本主義化、都市化という社会変動をとらえる力量を備えたもの〔山下 1988 424〕、と評価される内容のものだ。郷土会での各人の報告は、柳田にとって違和感を持つはずがないものだった。

5.4 『椎葉村是』との出会い

だが、柳田は郷土会に集う人々に次第に距離感を抱いていったことは否定できない。『郷土研究』編集の方向性に関する南方熊楠とのやりとりの一節をみよう。南方は「このさい郷土会の人々奮発してなるべく一人一論ずつ、またはせめて質問だけにても多く出さるべき」(1914年第2巻第6号)と要望する。だが、柳田は「郷土会は名は似て居ても「郷土研究」の身内ではありませぬ」とにべもない。「此会の諸君が南方氏ほど本誌の成長に熱心であつたら、きっと満足すべき雑誌が今少し早く出来たでしやう」(46ページ)と恨み言めいた言葉も並ぶ(1914年第2巻第7号)。郷土会のメンバーも柳田の『郷土研究』に対して、冷ややかとまではいわずとも冷めた目で見ていたのだ。

柳田が郷土会ではなく、まだ見ぬ全国の読者との運動を模索したのは、やはり椎葉村での経験が大きかったのではないか。それは中瀬淳村長との出会いだけではない。柳田が椎葉村で見出したのは、村長中瀬をはじめとして村是を自らの手でまとめ上げる力量を持った人々の姿だったと、藤井隆至はいう〔藤井 2008 119〕。『後狩詞記』については、狩猟の伝承とにかく焦点が当てられるが、他方で独自の村是の存在も大きかったことを示すその指摘は重要だ。

当時、地域経済の現況を統計数字で示し、それをもとに立案する地域振興計画書、すなわち村是が全国各地で作成されていた。それがゆえに柳田にとって村是は、自分たちはなぜ貧しい

のか、という切実な疑問を持つ地元の者が討議を重ねながら作成すべきものだった〔藤井 2008 120〕。だが、実際はどうだったのか。柳田は『時代ト農政』で村是の現状を批判する。この書は1910（明治43）年6月の『遠野物語』刊行に引き続き、12月に上梓されたものである。

（多くの村是には）実際農業者が抱いて居る経済的疑問には直接の答が根つから無い。それと云ふのが（中略・引用者）一種製図師のやうな専門家が村々を頼まれてあるき、又は監督庁から様式を示して算盤と筆とで空欄に記入させたやうなものが多いのですから、此村ではどんな農業経営法を採るが利益であるかと云ふ答などはとても出ては来ないのです〔柳田 1997c 249-250〕。

だからこそ柳田は「真正の村是は村全体の協議に由るか、少なくとも当局者自身の手で作成せねばなりません」〔柳田 1997c 250〕と主張する。そして、それに見合った村是として柳田が椎葉で出会ったのが『椎葉村是』だったのだ。これは村長の中瀬淳が編纂委員長となり、それぞれの字から選出された委員が自分の字で調査した数字を調査主任のもとに集め、それを集計してまとめられたものだ〔藤井 2008 120〕。まさに柳田が望む村是の姿だった。

農政学に経世済民の思いを込めていた柳田にとって、地方のこうした人々の存在はあるべき姿のひとつとして映ったに違いない。互いの連携も必要だ。それがゆえに柳田は『郷土研究』誌上からの呼びかけを通じて、各地から第二、第三の中瀬にあたる人物を見出せるという期待を抱いたのではないか。そうした期待は、逆に中央にあって官吏などに就く郷土会のメンバーに対する距離感にもつながっただろう。

5.5 『郷土研究』編集方針への異論

他方、郷土会のメンバーからすれば『郷土研究』誌上に柳田が寄せた原稿は、およそ共感できるものではなかった。その創刊号から12回にわたって連載された「巫女考」からは、郷土会での報告のような各地の調査に基づく手法はまったくと言っていいほど、見いだせない。主に文献を駆使して巫女のあり方を歴史的にたどる内容だったのだ。それまでの柳田を知る者からすれば、およそ農政学的な観点からほど遠いその記述には馴染めないものがあつたに違いない。郷土会の第19回例会の記録では、報告者からの「『郷土研究』に対する購読者自身の希望として、過去を研究すると同時に現在を研究し、併せて将来の社会政策の確立に、材料を提供することも出来るやうにしたら、余程面白からう」〔柳田編 1925 33〕という意見が示されている。一言でいえば、『郷土研究』誌上には現在の研究がなく、社会政策の参考となる記事がないという批判だ。それは柳田以外の郷土会メンバーの多くが抱く思いでもあつたろう。

柳田の編集方針に正面から異を唱えたのが南方熊楠である。自身は郷土会のメンバーではなかったが、『郷土研究』編集の方向性に疑問を抱いたという点では相通じる。南方は柳田にその意を書簡で伝え、柳田はそれをそのまま「『郷土研究』の記者に與ふる書」と題して3回に分けて連載した（1914年第2巻第5号～第7号）。

この論争に関してはこれまで多くの先行研究で言及されているので、ここでは深くは触れない。『郷土研究』は地方経済学の雑誌だとする南方の次のような一節が、その言い分をほぼ集約したものとなる（第2巻第6号）。

雑誌の半分以上を占むべき地方経済制度の事がその一小部分に縮減し、他の一部分を占むべき民俗学がはなはだしく膨大し、かつ民俗学に多少縁ありながら地方経済に何の必要なき説話学が別にまた等しく贅付をなしおるなり。

さらに翌第7号では「貴下先づ巫女考を中止し、制度経済の論文を巻頭に隔月位に必ず一つずつ出され度こと也」、そうしなければ「郷土に関係少なき古話考や伝説編のみで満たさるゝことゝなるべし」と、柳田に「巫女考」の掲載中止さえも迫る。いずれにせよ、柳田が『郷土研究』誌上に展開した「巫女考」以下の論は、郷土会周辺の者を多かれ少なかれ困惑させたことは確かである。

5.6 神道談話会という存在と柳田の指向の2つのレイヤー

なぜ柳田は地方経済学とは無縁な事象に対して、関心を大きく傾斜させていったのか。郷土会に柳田が参加していた時期、同時に柳田は別の会にも足を運んでいた。神道談話会である。1926（大正15）年に結成される神道学会の前身として位置づけられる研究会だ。この会の存在こそが『郷土研究』の方向性を決定づけていく。ここで柳田は初めて高木敏雄と出会い、『郷土研究』発刊の企画自体もその帰途に電車内で語り合ったという。

渡勇輝はこの神道談話会に着目し、柳田が郷土会に参加していた1910（明治43）年から1913（大正2）年にかけて、少なくとも5回、この談話会に出席していたことを明らかにしている。記録によれば柳田の報告は「巫」、「馬社の信仰」の2回。渡は高木との出会いも含めて『郷土研究』の構想自体が、神道談話会の議論のなかから形成されていった可能性について言及している〔渡 2023 244-246〕。たしかに「巫女考」以下、柳田が掲載した論考は神道談話会の流れを考えると、納得のいくものだ。その意味で、渡の指摘は重要である。

1917（大正6）年刊行の『丁酉倫理会倫理講演集』第183輯の「本会記事」は、柳田が「神道の価値」という講演をしたことを報告し、「同君は斯道研究に就て多年の蓄積があり、従つて又た卓抜な意見があること、「郷土研究」誌上で世のよく知る所である」（95 ページ）とふれる。ここから浮かぶ『郷土研究』は神道関連の雑誌なのだ。郷土会メンバーが理解する地方研究とは、およそ異質なことが読み取れる。

こうした柳田の相反するような方向性を明快に位置づけたのが大塚英志だ。大塚は柳田の思考が2つのレイヤーから構成されていたとする。一つ目は自然主義に関心を寄せ、習慣とその連続としての歴史に目を向け、社会政策論、農業政策論に力を入れる「公民の民俗学」。それに対してロマン主義的志向を持ち、異郷や起源への関心から起源論や固有信仰論に引き寄せられる「起源の民俗学」である〔大塚 2014 41〕。郷土会に向き合う柳田と、『郷土研究』を編集する柳田の方向性はまったく異なる。その違いは大塚が指摘する2つのレイヤーという存在抜きには、およそ理解しがたい。いうまでもなく前者が第1のレイヤー、後者が第2のレイヤーの具体化である。

柳田が同時期にこの2つのレイヤーそれぞれに依拠していたがゆえに、『郷土研究』の性格はまるで見えにくくなってしまった。本人がそれをどこまで意識していたかは、わからない。少なくとも2つのレイヤーを同時並行させていたことに十分自覚的でなかったことは、その書いたものからは伝わる。はたから見れば、迷走としか言いようがない事態である。

5.7 柳田の迷走と挫折

南方の『郷土研究』の記者に與ふる書」が完結した翌号（1914年第2巻第8号）末尾の「社告」には、新たに「読者の採集報告を切望する事項」が11項目、挙げられている。だが提示されているのは「まじなひと名けて（ママ）祈禱以外に災害を避くる手段」「大小の神様仏様に對

する信仰と其祭り祈願願掛け御礼参りの有様」他、神道談話会と関連するようなものが大半だ。南方の意見など、なかったかのごとき問いばかりが羅列される。

読者はランダムに並ぶ項目に仮に答えたとしても、それが何を明らかにすることにつながるのか、皆目見当がつかなかったに違いない。当事者がまとめるべきだとかつて柳田が訴えた村是の構成は、『椎葉村是』を例にとると「現況の部」と「将来の部」の二部構成だ。現況の部を調べることによって、将来の課題が見えてくる〔藤井 2008 118〕。だが、まじないを調べてもそれは何につながるのか。問いの先にあるはずの具体的な像は見えては来ない。そのあり方は迷走にしか見えなかったろう。柳田は『郷土研究』を通して折口信夫や中山太郎、早川孝太郎といった後に民俗学を担う人材には出会えたが、全国各地にいるはずの第二、第三の中瀬淳との接点は、ついぞなかった。また、中瀬自身も『郷土研究』には何も寄せてはいない。学歴を横断する学知の可能性を模索する試みは、創刊して4年が過ぎた第4巻第12号（1917年）で終焉。柳田にとって、挫折であった。

その挫折の今一つの原因は、柳田の編集姿勢にもあった。自身、誌面で「誰でも飛入り勝手次第の寄合ひ話をして見たい」「自由な雑談会」といっておきながら、実際には投稿者に対して情け容赦がない。たとえば「報告及資料」欄に寄せられたある伝説の紹介に対して、「編者申す。右の一編には甚しく書冊の臭気あり。多分は口碑を編輯したる寺の縁起などならん」と一刀両断だ（1914年第2巻第11号53ページ）。最終号掲載の「郷土研究の休刊」では、「不精確又は価値無しと見れば之を排斥して、筆者が怒り、且つ背くのを顧慮しなかつたのは無論である」（1917年第4巻第12号53ページ）とさえ、言い放つ。傲然としたその物言いは、とても「自由な雑談会」どころではない。

南方熊楠は『郷土研究』が終刊した1917（大正6）年の2月、寺石正路宛への手紙で柳田をこう、批判している。

柳田氏はずいぶん狭量な人にて、自分独り合点のあまり、面白からざる文をもって毎号（川村、大野、久米、中川、中山等、種々の偽名をもって）自分の文ばかり多く出し、しかして地方の読者が実際地方の事実を報告すると、たちまち例の随筆などを引いてやりこめにかかる。故にそれを懼れまた面倒がりて地方の小学校教員や好事家は手びかえる〔南方 1973 353〕。

なかなか手厳しいが、的を射ていることは確かだ。南方はさらに続けて、だからこそ投書家の数はおのずと制限されたという。読者からすれば、せつかく投稿しても柳田から悪しざまに言われる、さもなくば没にされるのでは、やる気も失せるだろう。実際、『郷土研究』は第4巻ともなると、冒頭に来るのは柳田が変名を使って書くものばかりとなる。ここまできると、終刊はやむを得なかったろう。

郷土会の盛況が新渡戸の人柄によるところが大きいとするならば、『郷土研究』の迷走と挫折も柳田の人柄によるところが大きかった、といわなければなるまい。どのような投稿が価値あるものなのか、柳田自身が懇切に説明しなければならなかったはずなのに、柳田はそれを怠る。いや、自身の内でさえも明確な輪郭は、まだ十分な姿を現わしてはいなかっただろう。

『郷土研究』誌上には、後に『郷土誌論』に所収されたものがいくつか掲載されている。「郷土史編纂者の用意」、「郷土の年代記と英雄」、「村の成長」などだ。しかしそこで提示された問題意識をもとに、学歴を横断するような、新渡戸の言葉を借りればソシアリティを具体化する場を形作るには、時期尚早だったのである。ここにあるのは一人いらだちながら、大塚英志が

言う「公民の民俗学」と「起源の民俗学」との狭間でさまよい続ける柳田の孤高の姿だ。

あれほど親しかった新渡戸稲造と柳田は、ある時点からまったく接点をもたなくなる。国際連盟委任統治委員として新渡戸は柳田を推薦したものの、柳田は結局、その職を辞したことがその決別につながった [佐谷 2015 127]。柳田はその後、『新渡戸博士追想集』にも原稿を寄せていない。

6. 最後に

柳田国男が新渡戸稲造に対して強く共感したのは確かだ。郷土会で体現されたような新渡戸のソシアリティ重視の姿勢は、柳田が新たな学知を立ち上げていくための運動論の大きな支柱となった。

ただし両者には大きな違いがあった。学歴という断層との向き合い方である。高等教育を終えた者の比率が、今よりもはるかに少なかった当時、学歴による断層は現在とは比較にならぬほど、大きかった。新渡戸はソシアリティを重視する一方で、学歴を基準として相手への対応を変えている。東京帝大卒などの高等教育を享受した層にはより直接的な対面的な関係を、中等教育未滿の学歴保持者には雑誌などを通じた間接的な関係を、といった具合に。実際、郷土会のメンバーの大半が、東京帝大卒だったのだ。

他方、柳田は編集者と読者、読者相互がつながるための場として雑誌の方向性を固めていった。学歴という分断を超えた交流を雑誌を通して果たすことが、柳田にとって重要だったのだ。『郷土研究』発刊はそうした方向性の具体化として位置づけられる。その背景にあったのは、『後狩詞記』、『石神問答』、『遠野物語』を刊行した折の経験だ。たとえば『後狩詞記』の大半を占める椎葉村長・中瀬淳の記述の水準の高さは、柳田を瞠目させた。高等教育とは無縁だった中瀬のような人物との出会いが、柳田に学歴を横断する「野の学問」の可能性を強く印象付け、その方向性を確かなものとした。

それを実現すべく創刊した『郷土研究』への投稿を通じて第二、第三の中瀬が全国から誌面に登場してくるはずだった。だが、それは叶わなかった。雑誌の性格が地方の研究で示されたような現在的関心に根差すものではなく、柳田が当時、強く関心を寄せていた民間の神道重視のものとなっていたからである。また、投稿された原稿を容赦なく一刀両断する柳田自身の編集姿勢が、多くの読者を遠ざけたことも大きい。『郷土研究』は迷走の挙句、1917（大正6）年に終刊せざるを得なかった。それは柳田にとって、挫折といってもいい結末だった。

歴史の記述では、あるいはもっと細かく言えば学史では、ともすれば現在の地点から見渡せる整合的な姿が描かれかねない。柳田がかかわった雑誌は、主なもので言えば『郷土研究』から始まり、『民族』、『民間伝承』と続く一連の流れのようにみえる。だが、『郷土研究』一つとっても、その内実は迷走と挫折といった苦渋の道行きだったのだ。ひと続きの「成功物語」とは、無縁だ。その一例を示そう。『郷土研究』終刊後18年を隔てて開催された第1回日本民俗学講習会は、学史上大きな画期となった。だが、『郷土研究』投稿者総数572名のうち、この講習会に参加したのは柳田を除くとわずかに5名を数えるに過ぎない [小国 2001 29]。「紙の広場」として雑誌で読者が交詢しあう場は、その場限りのものでしかなかったのだ。柳田は雑誌を創刊するたびに、新たな読者の獲得に奔走しなければならなかった。

とはいえ、柳田にとって学歴という断層をどのように横断して「野の学問」を立ち上げていくのか、という課題はその後一貫し続けた。柳田がそれとどう向き合ってきたのか、そして

そのための「運動」をどのように実践したのかという問いは、その「野の学問」の性格を明らかにしていく上で、欠かせない視点だ。

引用文献

- 浅田芳朗 1976 「和田千吉 略年表」浅田芳朗他編『日本考古学選集 4 大野延太郎・八木柴三郎・和田千吉集』築地書館
- 有馬学 2013 『「国際化」の中の帝国日本』中央公論新社
- 飯倉照平編 1976 『柳田国男 南方熊楠 往復書簡集』平凡社
- 石井正己 1999 「石神問答 解題」『柳田国男全集 第一巻』筑摩書房
- 伊藤敏子 2015 「新渡戸稲造における修養論の位相 包摂と排除の視点から」『三重大学教育学部研究紀要 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学』66
- 岩崎敏夫 1983 「伊能嘉矩あて柳田国男の書簡に就いて」『東北学院大学論集 歴史学・地理学』第13号
- 岩田弘三 2011 『近代日本の大学教授職—アカデミック・プロフェッショナルのキャリア形成』玉川大学出版部
- 牛島盛光 1993 『日本民俗学の源流—柳田国男と椎葉村』岩崎美術社
- 大塚英志 2007 『怪談前後 柳田民俗学と自然主義』角川学芸出版
- 大塚英志 2014 『社会をつくれなかったこの国がそれでもソーシャルであるための柳田国男入門』株式会社KADOKAWA
- 大月隆寛 1997 『顔あげて現場へ往け』青弓社
- 岡茂雄 1974 『本屋風情』平凡社
- 岡谷公二 1985 『貴族院書記官長柳田国男』筑摩書房
- 小田富英 2019a 「新渡戸稲造と柳田国男—新渡戸稲造の「地方の研究」から柳田国男の「思い言葉」教育へ」『新渡戸稲造の世界』第28号
- 小田富英 2019b 『柳田国男全集別巻一』筑摩書房
- 貝出寿美子編 1969 「新渡戸稲造年譜」東京女子大学新渡戸稲造研究会『新渡戸稲造研究』春秋社
- 菊地暁 2009 「敵の敵は味方か?—京大史学科と柳田民俗学」小池淳一編『民俗学的想像力』せりか書房
- 草原克豪 2021 『新渡戸稲造 1862-1933 我、太平洋の橋とならん』藤原書店
- 紅野謙介 2003 『投機としての文学 活字・懸賞・メディア』新曜社
- 小国喜弘 2001 『民俗学運動と学校教育—民俗の発見とその国民化』東京大学出版会
- 後藤総一郎 1985 『柳田国男論』恒文社
- 佐藤健二 2015 『柳田国男の歴史社会学—続・読書空間の近代』せりか書房
- 佐谷眞木人 2015 『民俗学・台湾・国際聯盟 柳田国男と新渡戸稲造』講談社
- 実業之日本社社史編纂委員会 1997 『実業之日本社百年史』実業之日本社
- 志村真幸 2013 「南方熊楠は『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌をどのように利用したか? 邦文論考との関係から」『歴史文化社会論講座紀要』10

- 竹内洋 2011 『学歴貴族の栄光と挫折』講談社
- 千葉徳爾 1985 「解題」『諸國叢書（第二輯）』成城大学民俗学研究所
- 筒井清忠 1995 『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店
- 鶴見太郎 2001 「「郷土会」再考 近代日本の「郷土」の複数起源」『人間・文化・心 京都文教大学人間学部研究報告』第3号
- 鶴見太郎 2002 『ある邂逅 柳田国男と牧口常三郎』潮出版社
- 鶴見太郎 2019 『柳田国男—感じたるまゝ』ミネルヴァ書房
- 遠野市立博物館編 2003 『佐々木喜善全集（IV）』遠野市立博物館
- 長浜功 1994 『常民教育論』新泉社
- 並松信久 2011 「新渡戸稲造における地方(おかた)学の構想と展開 —農政学から郷土研究へ」『京都産業大学論集. 社会科学系列』28
- 新渡戸稲造 1970a 「地方の研究」『新渡戸稲造全集 第五卷』教文館
- 新渡戸稲造 1970b 『世渡りの道』『新渡戸稲造全集 第八卷』教文館
- 新渡戸稲造 1970c 「余は何故実業之日本社の編集顧問となりたるか」『新渡戸稲造全集 第七卷』教文館
- 芳賀登 1972 『地方史の思想』日本放送出版協会
- 橋川文三 1985 「柳田国男」『橋川文三著作集2』筑摩書房
- 福田アジオ 2009 『日本の民俗学 「野」の学問の200年』吉川弘文館
- 藤井隆至 1993 「柳田国男に宛てた新渡戸稲造書簡」『新渡戸稲造研究』第2号
- 藤井隆至 2008 『柳田国男 『産業組合』と『遠野物語』のあいだ』日本経済評論社
- 前田多門 1936 「寄生虫としての感想」前田他編『新渡戸博士追憶集』故新渡戸博士記念事業実行委員
- 前田多門 1963 「道草の跡」堀切善次郎編『前田多門 その文その人』前田多門刊行会
- 南方熊楠 1973 「寺石正路宛書簡」『南方熊楠全集第九卷 書簡Ⅲ』平凡社
- 宮崎靖士 2012 「柳田国男初期三部作における「編著」としての構成をめぐる—『後狩詞記』から『遠野物語』『石神問答』へ」『論潮』5号
- 柳田國男編 1925 『郷土会記録』大岡山書店
- 柳田國男 1997a 『故郷七十年』『柳田國男全集 第二十一卷』筑摩書房
- 柳田國男 1997b 『遠野物語』『柳田國男全集 第二卷』筑摩書房
- 柳田國男 1997c 『時代ト農政』『柳田國男全集 第二卷』筑摩書房
- 柳田國男 1999 『後狩詞記』『柳田國男全集 第一卷』筑摩書房
- 柳田國男 2003 「余が出版事業」『柳田國男全集 第三十卷』筑摩書房
- 柳田國男 2006 「読者より見たる自然派小説」『柳田國男全集 第二十三卷』筑摩書房
- 山下紘一郎 1988 「郷土会とその人びと」柳田国男研究会編『柳田国男伝』三一書房
- 山本慎平 2015 「旧制第一高等学校校長時代における新渡戸稲造の指導者教育論 —『校友会雑誌』を中心に—」『経済学雑誌』115(4)
- 渡勇輝 2023 「柳田国男と黎明期の神道研究—神道談話会を通して」『アジア遊学 281 神道の近代 アクチュアリティを問う』勉誠社